

知恵を出し合い、汗を流して 産業の複合化による地域経済の活性化をめざして

海が生きている 漁業

従来、町内の漁家は日本海沿岸海域のイカ、マス、スケトウダラなどの回遊魚中心の漁船漁業を主体とし、ウニ、アワビなどの根付け漁業がそれを補完する経営形態をとってきました。しかし、二百海里規制の強化、磯焼け現象、貧栄養化や回遊魚の減少、漁獲可能量の規制など漁家経営を取り巻く環境は厳しさを増しています。

このような中で、資源管理型漁業への転換を行い、漁船漁業と増養殖漁業による複合型生産体制を確立し、漁家安定経営を目指しています。

平成十一年度に完成した「風力発電所」と、そのエネルギーを利用し種苗の中間育成を行う「栽培漁業センター」、増養殖に必要な多機能静穏海域を造成する「海洋牧場」の一連の施設では、アワビの養殖事業やナマコ養殖実験事業の技術発展と生産性の向上に努めています。また、海の貧栄養化や磯焼けによる漁業資源の回復を目指し、豊かな漁業を育んでいます。



Part.1



土が生きている 農業

北海道でも比較的温暖な気候に恵まれているため、古くから稲作を中心とした農業を営んできました。しかし経営耕地面積は極めて小さく、最近の需要動向を要因とした五〇%を超える減反の影響で農業経営は厳しい状況におかれ、若者の農村離れが顕著になっています。

このため町では時代の変化に即応した基礎的研究と生産技術の普及を図るため、平成二年、農業指導センターを設置しました。

また、農地の集約による農作業の効率化を図るため、は場の基盤整備を促進するとともに、現在はキヌサヤエンドウや立茎アスパラガス、高設いちご、ニラなど、高収益作物である野菜を中心とした生産性の高い農業経営を進め、豊かな農業を育んでいます。

